『清水九兵衛／六兵衛』展関連ボランティア企画

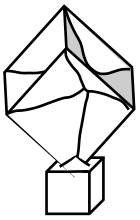
見て見て！九兵衛／六兵衛さんのシゴト

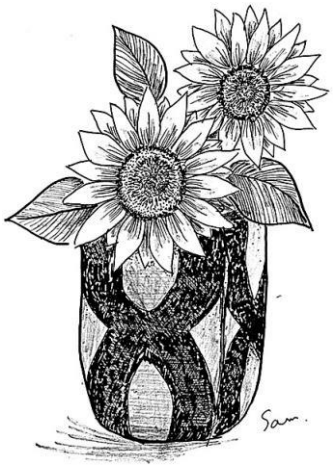
8F 第Ⅰ章

No.4 I-04 清水 洋《花器(オブジェ、目、方容)》

―器か彫刻か

清水洋・裕詞、五東衛、清水九兵衛、七代清水六兵衛ー5人いる？いいえ、同一人物です。
会場へ入ってまず目にするこの作品は、陶芸家・彫刻家としてこの後の人生を彷徨うことになる作者の姿と重なります。
当初花を生ける器としての陶芸作品でしたが、11年後彫刻家として再出発する際に作品の下部をカットし角度を変えて台座に固定することで、抽象的な彫刻作品へと作り変えました。
陶芸から彫刻への表現の方法を転換するにあたり、完成されたものであっても形を変えてしまう…作者自身の変革への強い意志を感じられませんか？（Y.Sa）





イラスト（Ma.T）

No.34 I-34 清水裕詞《黄釉筒花入》

―器か？？オブジェか？？

絶妙な曲線で形どられた美しいフォルム、土を感じるザラリとした質感、肉厚でどっしりした存在感があります。器の上部にはナイフを入れたような裂け目に窪んだ穴が開いています。このままオブジェとして飾ってももちろん素敵だけれど、花を活けたらどんな空間が生まれるでしょうか。真っ青な紫陽花か、向日葵なんかも器の茶色に黄色が映えてきれいそうです。穴からグリーンを垂らしても素敵かも。和室の床の間、洋間の猫足テーブルの上、どこに飾っても似合いそう、なんて想像が果てしなく広がります。さすがです！（M.Su）

No.7 I-07 清水 洋《花器》

草花をそっとさして茶室の床に。一瞬土である事を忘れさせるようなコルク模様肌。土を超えた作品に出会ったような感動を覚えました。

貝塚多い千葉の土はどちらかと言えば、アルカリ質で、焼物に適した粘土は地中深く掘らないと出てこないとか。千葉の土で焼かれた茶碗の茶会を諦めた後は、陶器に愛着持てないでいた私が、この作品に出会い変わりました。
（M.Sa）

No.48 Ⅱ-13 清水九兵衛《AFFINITY の継続》

―ヘアライン加工で見えてくる景色

九兵衛さんは空間に作品を馴染ませるためにアルミ彫刻の表面にヘアラインという加工をした。
ところで「ヘアライン加工」はドアノブ、エレベーターのパネルなどの生活器具にも施されている。
私の腕に巻かれた時計のチェーンもそうなのに気づき、一気に目の前の彫刻が身近になった。
コーナーに立てかけられたオブジェは壁に寄生しているかのようだし、白い壁をずっと見ていると彫刻の方が壁に飲まれているようにも見える。
地面のオブジェの方は、木の床が砂に見え、砂に飲まれた建築物のようにも見える。
景色が変わった瞬間だ。（Mi.T）

▽身近にあるヘアライン加工

時計のチェーン（撮影 Mi.T）

イラスト（Ma.T）

No.157 資-32 清水九兵衛 《朱甲舞(マケット２種)》

―六兵衛＝九兵衛≒六兵衛

JR 京都駅ビル 4 階室町小路広場に立つ「朱甲舞」は平安京時代の鎧をまとった舞人をイメージしているといわれる。神社の鳥居の朱色は作者にとって、黒い瓦屋根と同様、京都を連想させるひとつであった。
最初に建築を、続いて鋳金を学んだ作者は図面と模型の作製に余念がなく、特に周りの自然や建築物との関係性を重視する野外彫刻制作にあたっては作品の構想段階からの周到な設計が必要であることを展示された模型や図面が物語っている。
幾何学的な駅ビルに対して曲線的フォルムの朱色の舞人「朱甲舞」。京都観光の際は、ぜひ、ご覧あれ。（S.N）

No.114 Ⅲ-65 七代清水六兵衛《截土容黒釉茶盌（せつどようこくゆうちゃわん）》
No.77 Ⅲ-28 《飛孔一輪挿（ひこういちりんざし）》

大きな作品が多い中、手に取ったら両手の中に
すっぽりと収まりそうな抹茶茶碗。
初代六兵衛の黒楽を連想させる黒い茶碗の正面には、
ぽっかりと空いた穴。
陶芸家と彫刻家、伝統と斬新さを併せ持つ、
七代六兵衛（九兵衛）さんならではの作品か。
土に切り込みを入れるための穴を作品の一部とした
一輪挿の作品も合わせてご覧ください！
さて、この穴から抹茶の緑が見えるだろうか。
お茶を点てている時には、見えまい。
お茶を頂く時なら見えるか、などと空想しながら
作品を見るのも一興かと。（Sa.H）

No.55 Ⅱ-06 清水九兵衛《線上のイメージ》

―照明とのコラボ？

見る角度によって様々なフォルムを表すこの作品、どこに線があるのだろうか？清水九兵衛は、アルミニウムの表面を丹念に磨いて細かいブラシのラインをつけた。顔を近づけて見てみると、細い無限大の線に気づくだろう。ラインが引かれたアルミの面は、三か所で同じ盛り上がりを繰り返す。今度は少し離れてみると、同じサイズの盛り上がりが天井から放たれる照明の柔らかい反射に呼応して、千差万別の表情を見せるのだ。色彩のない万華鏡が銀色の輝きを放ち我々を魅了する。（S.A）

No.94 Ⅱ-45 清水九兵衛《PACK 4》

―アルミと陶器のコラボ

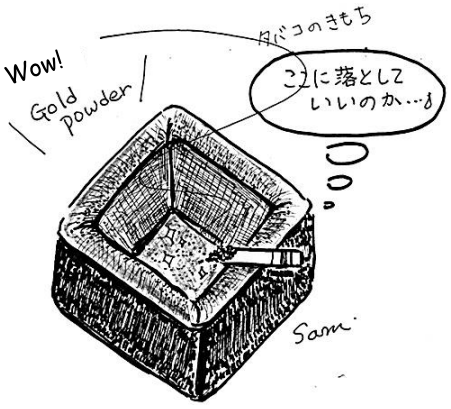
1997 年の作品。アルミニウムと陶器を組み合わせ、アルミが陶を包み込む、あるいはその逆の関係によって成立するものである。板状、または長方体など端正なアルミの造形性に対し、陶器には切れ込みとゆがみが入れられている。鈍い光沢の黒い釉色の瓦のような陶器が磨かれたアルミの質感に対して親和性を持って併置されている。アルミと陶の特質を知った清水の作品ならではないか。その後、色々な素材を組み合わせた作品へ展開していく。
*アルミとクリスタルガラス/ アルミ・木・和紙/アルミ・クリスタルガラス・和紙/白と朱に着色した和紙等

（K.K）

No.109 Ⅲ-60 清水九兵衛《correspond 9》

―サインもおしゃれ、
和紙による現代的なフォルムの作品

立方体のユニット９つを組み合わせた小ぶりな造形作品だ。立方体を面で支えた垂直水平構造ではなく、辺で支えることで、斜めの線と角度が表わされている。方向によっては、点で支えられているように見え、不安定にも感じられながら、物体として安定した存在感をもつ。
和紙による複数のフラットに囲まれた空間は、クリスタルガラスのユニット１つがあることで、複雑な空間がいくつも現れる。思わずあちらこちらと覗き込み、飽きず眺めた。和紙という素材は木を内包したことで、面や立体の切れ目に表情を与え、「茫洋とした」質感に気品を感じる。
(Y.Su)



イラスト（Ma.T）

No.92 Ⅲ-43 No.106 Ⅲ-57 清水九兵衛《PACK A》《CORRESPOND》

―おしゃべりな土を感じる

鞘堂で《PACK A》を観た。
立ち並ぶ長方形のアルミ版は京町路地に並ぶ格子戸を、陶部分は京町を覆う瓦屋根を想像させる。
直線的なアルミに挟まれた、曲線的な陶部分のゆがみやひずみがとても優しく美しい。
ヘアライン加工のアルミの感じと伊羅保釉と鉄釉を吹き付けた陶とのマッチングがまた良い。
更なる親和性を求めたのか 2000 年に《CORRESPOND》を発表している。
形状的に綿密な調整が図られ、洗礼された作品になっている。より質感の差を感じられるというが、私は《PACK A》の方が好きだ。（Ma.H）